AKARINCHU NEWS

March 31,2023

あかりんちゅとは

あかりんちゅとは、寺社などからやむなく廃棄されてしまう蝋燭、通称「残ろう」を回収・再利用し、手作りキャンドルの販売、キャンドルナイト・キャンドル作り教室の開催を行っている。モットーは「エコでスローな夜を。」

八幡堀まつり

2022 年 10 月 22,23 日に、滋賀県近江八幡市にある「八幡堀」にてキャンドルナイトを行なった。あかりんちゅが八幡堀まつりに参加したのは初めてで、22 日は他の団体のキャンドルナイトの見学・お手伝いを行い、23 日にあかりんちゅのキャンドルナイトをした。キャンドルを 500 個使用し、300 個は「かわらミュージアム」前の道を照らし、残り 200 個は階段にハート型に並べて点火した。ハート型に並べた階段の反対側で歌っていた歌手の方から、「とても綺麗！」と感想をいただいた。歌と光が生み出す空間が魅力的で、八幡堀まつりにきてくださった方も、楽しんでくださった。



さまざまなイベントを実施



手作りキャンドルの販売

製作体験会



あかりんちゅ自慢

①S プロジェクトであり、イベントを行った 際の依頼料と販売の売上金で活動していること。

②県内外、どこへでも行って活動できること。材料は自分たちが全部持っていくため、体験教室は平らなところとコンセントが 1 つあれば活動できる。

③様々な団体との関わりがあること。近江楽座の団体から キャンドルナイト用のロウソクを作ってくださる福祉団体のジョブカレさん、残ろうを集めてくださる滋賀教区浄土宗青年会さんなど、2 つ目に挙げた特性上、様々な人と関わって活動していける団体である。

感染予防対策

コロナ禍に合わせて、製作体験会の時には必ず手指消毒をしていただき、会場では必ず換気を行なった。



発行日　2023年3月31日

滋賀県大生き物研究会

滋賀県大生き物研究会とは

滋賀県大生き物研究会とは，滋賀県立大学内や周辺地域で生物の調査や採集，観察などを行う近江楽座です．

2022年度には，植物，水生昆虫，魚類，トンボの調査やプランクトンの観察会，湖風祭での展示などを行いました．

メンバーは，生き物好きな個性豊かな人が集まっています．

プロジェクト自慢

生き物研究会には，いろいろな知識や経験を持った人たちが集まっています．

生き物研究会に所属すれば今まで知らなかった生き物たちに出会えるかも？

皆さんも魅力的な生き物がたくさんいる彦根を堪能して，世界の解像度を上げませんか．

地域の方の声

地域の方も知らなかった生き物を見つけたりすると「そんな生き物がいたなんて知らなかった．今は生き物が減っていたりするけど，頑張ってね」と応援されることもあります．

チームのビッグニュース！

2022年の湖風祭で生き物研究会が行った「カタビロアメンボすくい」があのオイカワ丸先生から好評をいただきました．

カタビロアメンボとは，大きさ約1mm程度の水生昆虫で，今生き物界隈で最もアツい虫といっても過言ではありません．

そんなカタビロアメンボに触れられる機会として設けたカタビロアメンボすくいについてオイカワ丸先生は，「ケシカタビロアメンボはよく飛ぶから、その辺から採ってきた個体でカタビロアメンボすくいをして、万が一逃げても遺伝子攪乱につながるリスクが低く、これは良い提案ですね。（Twitterより）」といっていただきました．



（↑カタビロアメンボ
↓カタビロアメンボすくいを楽しむ人たち）



一年間の成果と課題

今年一年で活動の幅を大きく広げられましたがまだまだ知識や経験面で不足しています．

調査結果を研究会誌に投稿することで生態系保全の一歩になります．データの管理や取り扱いが今後課題になっています．

←生き物研究会の最新情報はTwitter（@bassers_usp）からチェック！

快蔵新聞

電通育英会から助成金をいただきました！

学生と地域をつなげる ワークショップ

背景と目的

公益財団法人電通育英会様の「学生を対象とする次世代ルリーダーの育成活動」にて助成金をいただきました。助成金をいただいた活動の一つに、今年度から新しくワークショップ事業に取り組みました。今年度改修している「たく庵」を中心に月一回のワークショップを開くという事業です。コロナ禍により町とのつながりが希薄化した中で、地域とのつながりを新しく作るためにコミュニティスペース「たく庵」で木工 WS、古着リメイク WS、マルシェによる小物 WS などのワークショップを行いました。町の人との交流と学生の技術力の向上、まちづくり人材における主体性を身につけることを目的としています。



【写真】子ども向けものづくり WS の様子（2022/11/27）



【写真】木工 WS の様子（2023/1/22）

成果と課題

毎月1回、講師から学生に向ける WS（インプット）と学生から町の子ども達に向ける WS（アウトプット）を行う事ができました。それにより、学生の技術力の向上やものづくりに対する興味関心、町の方との交流を図る事ができたと感じました。しかし、今の段階ではそれぞれが独立しており、改修の WS を知ってくださっている方は他の活動を知らなかったり、マルシェにきてくださっている方々はとよさと快蔵プロジェクトについて知らなかったりという状況です。そのため、今後は一つ一つを独立して行うのではなく、全体をゆるやかに繋ぐことのできる WS を行い、地域と連続性のあるフラットな関係を築いていきたい。

とよさと快蔵プロジェクトとは

滋賀県の豊郷町内にある空き家や空き蔵を地域資産として捉え、学生なりの視点から付加価値を見出し、活用している。改修だけにとどまらず、地域イベントの参加やバーの運営など幅広い活動を通して町の方と共に町を盛り上げている。私たちが活動の拠点としている滋賀県一小さな町には空き家や空き蔵が点在している。

私たちはこうした町の負の遺産に着目して、学生なりの発想で価値を見出し、地域を盛り上げる活動を行ってきた。十九年間の活動を経て、プロジェクトが広く町の人に認知され町内で活動する学生団体として受け入れられた。NPO 法人とよさとまちづくり委員会や豊郷町役場をはじめとするこれまで培ってきた多くのネットワークを活用し、より広い範囲で様々な団体との情報交換の場を設け、そのスキルをこの町に還元する町を盛り上げる町の人をサポートするという学生としての理想的な立場をとりながら、将来的に住民が町について考えるという姿勢を定着させるということを目的として活動する。

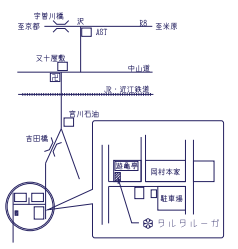
これまで十四軒の物件を改修してきた。改修するだけでなく、それらを利用することで初めて古民家を活用できていると言えると考える。改修した物件でバーの運営をしたりイベントを企画・開催したりと、地域や他団体などに向けてとよさと快蔵プロジェクトの活動・改修物件を発信している。

全体を改修、企画、タルタルーガ、redon、広報の五つの部門に分けそれぞれが責任を持って事業を行うことで、幅広い活動も組織的に運営することができている。

地域とのコミュニケーションの場 タルタルーガ営業再開！

新型コロナウイルスの影響により休業していたタルタルーガですが、昨年の3月から営業を再開の3月する事ができました。約三年間営業できていない期間があったため、営業再開するにあたって、一からタルタルーガを見い直すことにしました。営業再開の告知、メニューの改善、営業マニュアルの作成、店内の改装、公式 LINE やポイントカードの作成など営業体制を整えていきました。営業では、町の人や以前からの常連だったお客様に加え、OBOG の方、大学の先生方にも来ていただき、町とのコミュニケーションの拠点となる場所として、タルタルーガの重要性を再確認することができたと感じています。また、町の方との交流の中で、活動に対するアドバイスや新たな気づきを発見する事もありました。現在はシフトが集まらず不定期の開店になってしまっているため、定期的に週3ほどで開店ができるように、シフトを集める工夫を行なっていきたいです。

【住所】豊郷町吉田六十一一
【営業時間】18時～23時
定休日はSNSをご覧ください



Instagram @newtarutaruga

公式 LINE @847cbhno

【写真】タルタルーガ研修会（2022/8/6）

【写真】タルタルーガ営業の様子（2022/4/9）

地域の方の声

まだまだ活動制限が続く中、今年も豊郷町に通い続けてくれた、快蔵メンバーに感謝します。地域ではコロナ禍の中、何をするにも難しくなり、自粛や辞めて行く事が多くなり、やりたくても気力も人材集めも出来なくなってきているのが現実です。

そんな中、吉田地域の真ん中にあるたく庵は、地域の人が様々な要素で集える場所として、町や地域がやるべき事を、率先して行って頂き、町に与える影響はもちろん、町外の方からの問い合わせもあります。また各地区の事業や会議の運営には欠かせない存在です。皆さんの活動は、地域に住む若い人にも影響があり、この町に戻る人が目に見えて増えてきています。こんな環境下の中でも変わらない活動を続けて、地域に無くてはならない存在になった快蔵メンバー、その活動を支え頂いている滋賀県と滋賀県立大学の皆さまに感謝申し上げます。今後ともよろしくお願い致します。

とよさとまちづくり委員会
岡村博之

1年間のまとめ

今年1年間を通して、昨年と比べ、多くの活動ができた一方で、まだまだ町の人に活動が認知されていないということが課題として感じた。「たく庵」の改修、WS 事業、タルタルーガの営業などの活動より町の方と交流する場面も増え、昨年より密な関係を築ける事ができたと感じる。私たちの活動は、町とともに活動しているのだと感じる事ができた。一方で、学生が町の中に入って活動していることに対してよく思わない方もいるということを学んだ。改めて私たちの活動は町の中に入らせていただき、活動をさせてもらっているという意識を忘れずに、周りに対して活動の認知を広げる工夫をとる必要があると感じた。来年度は、全体的に関わりを持ちつつ、連続性を感じることのできる活動にしていく必要があると思う。地域の方とより密接にお互いに意見交換ができる関係にあれば、町のニーズを知ることや活動に対するアドバイスをいただくことにつながる。このプロジェクトが十九年もの長い間続いてきたのは、たくさんの方にご協力いただき、学生と町の方がお互いに歩み寄り1から関係を築いてくださったおかげである。二十年という節目に、新たに関係を再構築することで、町の方と一緒にまちづくり活動を行っていきたい。

近江楽座 Harmony 新聞

ビッグニュース！

京都新聞福祉奨励賞を受賞

令和四年十二月二十二日に、令和四年度「京都新聞福祉奨励賞」を受賞しました。福祉奨励賞は、京都府・滋賀県内で福祉の各分野における実践者で優れた業績や活動を実施し、将来福祉のリーダーとして活躍が期待される個人または団体に贈られるものです。今年度は、福祉賞を一個人一団体、福祉奨励賞を二団体受賞しましたが、学生団体としては唯一Harmonyのみが受賞することができました。左の写真は、令和五年一月二十七日に京都新聞社本社にて行われた授賞式の様子です。

今回こうして受賞できたのも、普段活動を支えてくださっている関係者の方々や、歴代の先輩方のおかげであると感じています。これからも皆様の期待に応えられるよう、精一杯励んでいきたいと考えています。



プチじまん

クリスマスコンサート

Harmonyでは、毎年様々な団体をお呼びしてクリスマスコンサートを開催しています。今年度は3年ぶりの現地開催となりましたが、約100名もの地域の方々にお越しいただき、にぎやかなコンサートとなりました。



プロジェクト紹介

ボランティアサークルHarmonyは、NPO法人障害者の就労と余暇を考える会メロディーの専属ボランティアとして、2003年から活動しています。具体的な活動内容としては、月に一度の定例活動（茶道・油絵）や、クリスマスコンサート・お泊り会といった行事の企画を行っています。様々な活動を通して障がい者の方々や関係者の方々と楽しく関わっていけることが、このプロジェクトの醍醐味でもあります。

活動を振り返って

今年度も昨年同様、コロナの影響が残る中での活動となりました。しかし、昨年度と異なる点はアフターコロナに向けた取り組みを積極的に進めることができた点です。例えば、コロナ渦で途切れかけていたメンバー内でのノウハウ共有や、新しい取り組みとしてのグッズ販売など、行動制限が残る中でもできる限りの活動をしてきました。

今後の目標としては、コロナ渦で中止となっていたその他のイベントを正式に引き継ぐこと、そしてコアメンバーの獲得です。引継ぎが確実に出来なければ、これからの活動の質の低下に直結しますし、コアメンバーが不足していれば十分に活動を行うことができません。したがって、来年度は、引継ぎとコアメンバーの獲得に重点をおいて、活動に尽力します。

地域の方々の声

今年度の活動を振り返って一番に思う事は、油絵の活動に対して、息子がものすごく意欲的になった事だと思います。最初の頃は絵を描くのが苦手だという事もあって、すぐに席を立ってしまっていましたが、今では最後までしっかり座って、キャンバスに絵を描く事が出来るようになりました。ハーモニーの学生さんも、押し付けたり強要したりすることなく、側で見守っていてくれるので、いつも安心して活動に参加させてもらっています。また、油絵を描かせてもらう経験も、学生の方と関われる事も、日常の生活の中ではなかなか出来ない事だと思っているので、本当に有り難く思っています。

今後のハーモニーに期待する事は、福祉に興味を持ってくれる人が一人でも増えてくれる事です。若い学生さんがハーモニーに参加する事で、少しでも福祉について考えるきっかけになってくれたら、障害を持つ子の親として、こんなに嬉しい事はないと思っています。

メロディー　原　由紀子さん

地域博物館新聞

2023年3月31日

米原奥伊吹展示事業完結！





右図　ジオラマ模型

右図　竹刀に関する展示

東草野の魅力を伝える展示室

２０２０年から行われていた米原市東草野の魅力を伝える奥伊吹の展示作業が今年度をもって完了した。

キャプションやパネル、模型など０から制作し、展示物の展示位置や展示方法まですべて学生の手で作られた地域博物館が２０２３年７月に開館した。

米原市東草野は重要文化的景観地に登録されており，この展示室は東草野の地域文化財を保存するだけでなく，観光拠点として機能することが期待されている。

また東草野の４地域の景観を表したジオラマ模型（左上）や地域の産業についての展示（左下）など地域の伝統を知れる学びの場や地域交流の場になることも期待されている。

東草野の景観を楽しむとともにその地域と共に生きる人たちの営みを知ることができる展示室に立ち寄ってみてはどうだろうか。

プロジェクトの内容

地域にはその土地の特色が表れた文化があり，地域文化財として人々の生活の間で育まれ継承されてきました。地域博物館プロジェクトはこのような地域文化財を地域の方々と共に「地域博物館」という形で保存・有効活用していくことを目的としている。

地域博物館プロジェクトが行っている主な活動は，西川嘉右衛門家の古文書調査，白谷荘歴史民俗博物館の資料調査の２つである。

西川家調査では，古くからの葦問屋である近江八幡西川嘉右衛門家に保管されている，葦の栽培・流通に関する古文書の解読・整理を行っている。

白谷荘歴史民俗博物館調査では，白谷荘歴史民俗博物館に収蔵されている学校教育関連資料を調査・整理し，資料の登録文化財認定を目指している。来年度には白谷荘歴史博物館と連携し絵ハガキ展を開催する予定である。

また，これらの調査以外にも，毎年ビバシティ彦根で開催される「博物館夏祭り」への参加や，湖風祭での民具の展示活動・ワークショップも行っている。ここ数年は新型コロナウイルスの感染拡大により中止されていたこれらの活動であるが来年度から少しずつ再開される見通しである。

主な活動日は月２回、第三、第四日曜日である。

地域の方からのコメント

白谷荘歴史民俗博物館の調査・整理・維持・保存の為に日曜日のお休みに継続してきていただいており感謝します。特に継続して活動していただいていることは学生の皆様は実感していておられないかもしれませんが当館だけでなく地域の文化の保存に力強く貢献しているように感じます。最近は地域の文化財に対する関心は非常に薄れてきていると感じます。高島地域（マキノ町白谷地区）でも人口が減り過疎化が進んできています。祭り事や様々な行事も縮小され地域文化も衰退し消え去ろうとしています。当館は建物の老朽化・維持活動のための資金不足・文化活動に関わる知識不足等様々な問題に悩まされています。そのような中で活動されて皆様は活動を通じて当館や地域を活性化しています。皆様も学術的なことだけでなく現地へ出向き資料に直接触れて肌感覚で地域文化の現状を感じているのではないでしょうか。その感じた独特の感性は将来の消え去ろうとしている地方文化の保存・皆様の将来の活動に役立つものと思います。有難うございます。

白谷荘歴史民俗博物館　川島光男

古文書調査は意外とたいへん!?

当プロジェクトの目玉である古文書調査は意外と難しい。くずし字という，普段我々が使ってる字をくずし，形を省略した字で書かれているため，辞書で調べようにも，まずその字のあたりを付けなければいけないのだ。これが結構難しい。しかし，そんな難しい古文書解読でも，一年続ければ慣れにより，自然と読めるようになってくるのである。



右図　古文書解読の様子

ちょっと聞いてよ！

プロジェクト自慢!!

- 活動場所が県内各地に！！
  ⇒近江八幡，高島，米原など滋賀県のあらゆる地域で活動中
- 実物に触れることが出来る！！
  ⇒貴重な古文書・民具に直接触れることが出来る。学芸員志望者におすすめ！

今年度の主な活動

- 西川嘉右衛門家調査（近江八幡市）
- 白谷荘歴史民俗博物館調査（高島市マキノ町）
- 奥伊吹展示事業（米原市東草野）
- 葦刈イベント（近江八幡市）

成果と課題

白谷の調査は調査資料の大部分を占めていた和本が終わった。そこで一つ区切りがついたこともあり、新たな事業として絵ハガキ展を行う運びとなった。

その一方で西川家の調査の方で新たな問題が発覚した。当初１９００通ほどであると思われていた古文書だが、いまだに蔵内に未発見の古文書がある可能性が浮き彫りとなった。今年度は去年度に比べ安定した調査の開催と調査に参加する人数を確保できたことで調査自体の効率は上がったが、新しく発見される古文書の量次第ではこの事業がさらに長期化する可能性が出てくる結果となった。

奥伊吹の展示事業が今年度の７月に東草野山村博物館の開館と共に終了した。民具の収集から常設展示室を一つ作り上げるという貴重な経験は今後の展示事業の活動等で生かされると考えられる。

来年度は主となる事業が一つ終わったこともありコロナ以前に行っていた学内展示やビバシティの展示イベントへの参加など行えるようメンバー同士が密に連携をとりながら上手くスケジューリングすることが課題となる。

フラワーエネルギー「なの・わり」

チームのビッグニュース

二年ぶり！子供向けイベントへの参加

今年度は昨年度よりも多くのイベントを実施することができた。11月5、6日には湖風祭で唐揚げ・フライドポテトの販売を行った。学内外から多くの人が訪れるため、活動を宣伝するいい場になると考えた。両日とも予想以上の売り上げで、合わせて約600食売り上げることができた。約3年ぶりの出店だったが部員で協力し、大きなトラブルなく2日間終えることができた。

また、翌年1月21日には昨年度同様、三井アウトレットパーク滋賀竜王にて、子供たちを対象としたスライムつくり体験会を開催した。スライムつくりを通じて、科学の面白さを知ってもらい、エネルギー問題に興味を持つ第一歩とするための位置づけだ。当日は30組を超える子供たちが参加してくれた。みんな笑顔で楽しんでくれ、科学や自分の手で何かを作ることの面白さを感じてくれたはずだ。



▲湖風際当日の様子

▲三井アウトレットでのイベントの様子

地域の声

お子様の興味をひきやすいスライム製作体験で、多くの方が参加されていました。今後も良い形でご一緒できることを楽しみにしています。」

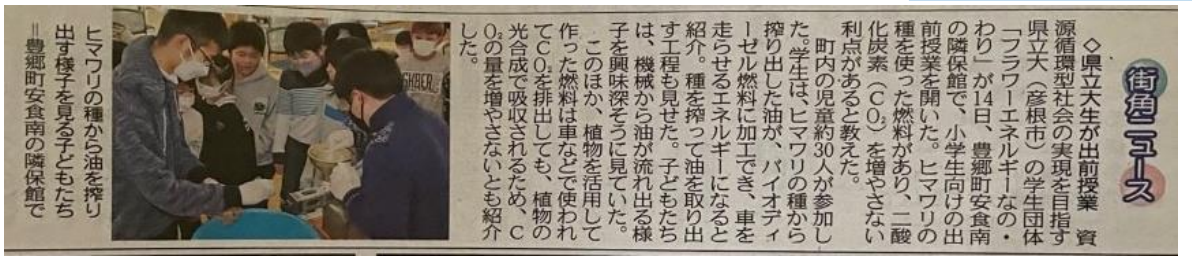
搾油の実演という普段見ることができない様子を見せていただきましてありがとうございました。参加した子どもたちも興味津々でした。」

プロジェクト紹介



▲今年度のひまわりの開花

フラワーエネルギー「なの・わり」は、植物を使った資源循環型社会の形成を目指したプロジェクトである。主な活動は、菜の花、ひまわりを栽培し、収穫した種からバイオディーゼル燃料を作っている。また、この取り組みや環境問題を小～高校生に知ってもらうために、出前授業や高大連携授業を行っている。また、科学の楽しさを体感してもらうイベントを各地で開催している。出前授業の依頼も募集しているので、ぜひブログにコメントを。



街角ニュース

◇県立大生が出前授業　資源循環型社会の実現を目指す県立大（彦根市）の学生団体「フラワーエネルギーなの・わり」が14日、豊郷町安食南の隣保館で、小学生向けの出前授業を開いた。ヒマワリの種を使った燃料があり、二酸化炭素（CO_2）を増やさない利点があると教えた。

町内の児童約30人が参加した。学生は、ヒマワリの種から搾り出した油が、バイオディーゼル燃料に加工でき、車を走らせるエネルギーになると紹介。種を搾って油を取り出す工程も見せた。子どもたちは、機械から油が流れ出る様子を興味深そうに見ていた。

このほか、植物を活用して作った燃料は車などで使われてCO_2を排出しても、植物の光合成で吸収されるため、CO_2の量を増やさないとも紹介した。

ヒマワリの種から油を搾り出す様子を見る子どもたち＝豊郷町安食南の隣保館で

▲12/15の中日新聞の一部に掲載された

ちょっと聞いてよ！プロジェクト自慢

12月14日に豊郷町の隣保館で、小学生を対象倒したバイオ燃料に関する簡単なプレゼン、搾油機を用いたひまわりの油の搾油を実演した。また、中日新聞の貴社の方が来てくださり、翌日の新聞の一部で今回のイベントの様子を取り上げていただくなど、地域に発信するいい機会になった。参加してくれた子供たちからは 初めて見たり知ったりしたことばっかりだったけど、楽しかったです。」などの声を聴くことができた。

成果と課題

今年度の一番の成果は湖風祭や豊郷町の隣保館でのイベントなど、地域の方との交流を持てたことだ。

課題としては、私たちの活動において小さな子供たちや中高生に、より一層興味を持ってもらえるような工夫が必要であると感じた。

廃棄物バスターズ新聞

令和4年度
活動報告号

新たな環境モデルの構築へ
廃棄プラスチック×科学

当団体は、「廃プラを用いたモノづくり・福祉活動・環境教育・地域美化」の4つの柱を軸に活動しています。

これまでに、マテリアルリサイクルの促進を図るため、廃棄プラスチックを材料にしたリサイクルプランターの開発および製造、販売を行ってきました。さらに廃棄プラスチックを用いて雨水タンクを作るプロジェクトを進めてきました。

本年度は特に環境教育に注力し、学びを通じてプラスチックと環境問題について考える多くの機会を設けました。

◆環境意識の改革を目指して

未来をつくるRキッズ連続講座（しがローカルSDGs研究会）、令和4年度理系専門講座（守山市立図書館）などで講師として幅広い世代の方々に向けて講演を行いました。

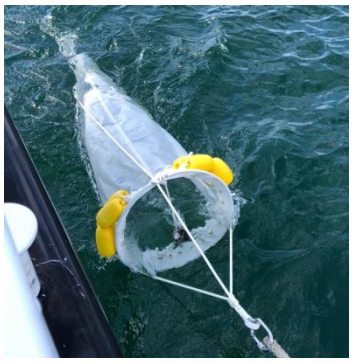
近年、環境問題の観点から「プラスチックは悪者だ」と考えられる傾向にありますが、私たちは「人が管理できていないプラスチックが悪さをしている」と考えています。私たちの思いとしては、「プラスチックの良さ・必要性を正しく理解したうえで、環境問題解決に目を向けてほしい」、この思いを今後も引き続き、学びを通して伝えていきたいです。



マイクロプラスチック調査
琵琶湖で回収を実施

環境科学部の丸尾先生にご協力いただき、実習船「はっさかII」で琵琶湖沖約5kmでのマイクロプラスチック回収作業を行いました。現在、回収したマイクロプラスチックの解析を行っています。

現状では私たちの生活を脅かさないとしても、プラスチックが琵琶湖に流出しているという事実に危機感を持つ必要があると実感しました。



スポGOMI in HIKONE
ゴミ拾いはスポーツだ！

たねやグループとの共同企画で、チーム対抗競技としてゴミ拾いを楽しむ「スポGOMI」を実施しました。一生懸命ゴミ拾いをしたプラスチックについての勉強会を行いました。

新しいスタイルの清掃活動は、体験しながら学ぶことができる良い機会だと非常に好評で、啓発活動の一環として今後も続けていきたいと考えています。

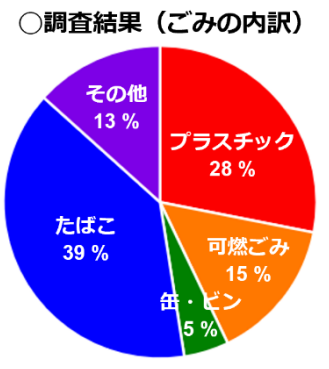


その他の活動

◆彦根キレイ隊参加

彦根駅周辺の美化活動をされている彦根キレイ隊と、彦根市周辺のゴミ拾いや彦根駅前にある花壇の手入れを行いました。

ゴミ拾いの際、拾ったゴミの調査も実施し、プラスチックゴミはたばこ類に次いで多く、特にマイクロプラスチックに変わる前の劣化したものが多く見られました。活動を通して、ゴミの回収やリサイクルの必要性を改めて実感しました。



◆ご当地キャラ博2022参加

3年ぶりの現地開催となったご当地キャラ博2022にボランティアスタッフとして参加しました。会場設営や巡回清掃、ゴミの回収を行いました。

◆広報活動

たねやグループの方と共同で実施した清掃活動の様子がびわ湖放送のニュースで取り上げられました。YouTubeにもアップロードされているので、ぜひご覧ください。

今後の展望

マテリアルリサイクル事業や今年度から実施したマイクロプラスチック調査の取り組みをさらに拡大させるとともに、清掃活動など地道な活動を精力的に取り組んでいきたいです。

廃棄物バスターズ　代表　長田直也　副代表　太田鈴菜　　制作　小谷徹也　西山亜希

政所茶新聞

2023年（令和5年）3月31日
金曜日



新茶摘み
三年ぶり学外参加者募集

コロナ前の活気へ再出発



二年間コロナウイルスの影響により停止していた学外募集を 今年度再開した。三年ぶりということもあり、参加者の募集はスムーズには行かなかったが、当日はここ数年にない活気を見せた。プロジェクトメンバーの中には初めて 茶摘み参加したメンバーもおり、二回生ＳＴさんはその一人であった。

イナズマロックフェス2022に参加



今年度も収穫した新茶を煎茶とほうじ茶商品化した。また、番茶も商品化をし、さらに実際にイベントに参加しＰＲ販売を行った。今年度は三年ぶりに開催された 全国的にも有名である、イナズマロックフェス２０２２にブース出店し、ＰＲ販売を行った。滋賀県内の方はもちろん、東京や広島の方までブースに来てくださり、政所茶のことを知っていただいた。一回生ＷＴさんは、半年間行ってきた活動や、活動を通して感じたことなどを伝えた。立ち止まって聞いてくれたり、エールを送ってくれたりする方がおり、思いが伝わったことが嬉しかったそうだ。

メンバーの中にはロックフェスのステージに立ち著名なお笑い芸人とトークしながら政所茶のＰＲを行った。一回生ながら ステージに立ちPRをして下さったＲＦさんは当初、発信方法が分からず、困惑したそうだ。しかし、リーフレットに目を通し、活動への理解を深め、さらに発信活動をしている先輩の姿を模倣し、ステージで上手くアピールできた。「活動や政所茶に興味を持ってくださった様子を見たときは嬉しかったです。」とＲＦさん。今後もＰＲ活動に尽力していく。

畑作業の苦悩の裏に



今年度七月に 長雨が続いた。本来ならば 二日間で終わる 畑作業が長引き、八月の炎天下で、弱音を吐きたくなるような環境炎天下での作業に苦しんだ。作業の終了に終わりが見えない中、 地元の方々が 手政所茶レン茶 〝ー の畑作業に手を貸してくださった。一回生ＹＨさんは地元の方々の姿を見て、地域のつながりの力というものを改めて感じたそうだ。「大学生になりアルバイトを始めると、作業というものに対してどうしてもお金という対価を求めるようになってしまうところがあるが、お金以上のコミュニティの力やその大切さを感じる機会になったという。畑作業のピンチが地元の方々とのつながりを再確認するきっかけとなった。

政所茶レン〝茶ー十周年

感謝祭開催

地域の方々に支えられ 今年度で政所チャレンジャー湧かす10周年を迎えた。十周年を記念し 実習感謝祭を開催した 招待状を送付したのが 開催予定日の 一週間ほど前でありかなり直近での 連絡となり、不安要素が多々あったが それらを吹き飛ばすように オークの地域の方々が 次週に祝ってくださった。「感謝祭を通し、これだけの多く人々に支えられていたのだと再確認できた。もらったものを返していけるよう一層力を入れていきたい。」二回生ＨＴさんは意気込んだ。

地域の方の声

11月に農水省や近畿農政局、県や市の茶業に関する担当者が政所に来られる機会がありました。その日が茶レンジャーの落ち葉を入れる作業日でした。農水省の担当者が視察中に学生を見かけ足を止め、「政所茶の魅力は？」「無農薬栽培の大変さややりがい」は？「茶レンジャーとは？」など次々と質問されていました。視察前に「若い人たちの活動や交流人口について教えてほしい。」と聞いていたので茶レンジャー、茶縁の会、八日市南高校の資料を用意はしていましたが直接話せたことで資料の価値が高まりました。

農水省の方が評価されたのは、地域の魅力とそれを体現していた若い人でした。ありがとう。

一年間の活動を通して

今年度の活動は昨年度よりメンバーが減少したことより、活動の規模は縮小してしまった。しかし、コロナ禍で分かりにくかった人々とのつながりは健全であり、どんな状況であろうと、できることを続けることの重要性を体感した。現在は人数不足の問題を解消することはもちろん、学内において政所茶を知らない人が多いこともあり、学外のみならず学内にむけたＰＲ活動も行っていきたい。

発行日：2023 年 3 月 31 日

BAMBOO HOUSE PROJECT



どんな活動？

全国的に問題となっている日本の放置竹林、ここ滋賀県湖南市の放置竹林もまた、同じ問題を抱えていた。鬱蒼とした竹林は不法投棄のゴミで溢れ、やがて近隣の住宅街にまで竹が侵入し、地域住民の悩みの種になっていた。そこで、菩提寺まちづくり協議会から当指導教員の陶器浩一教授のもとにこの竹林をこどもたちが集まる場所に依頼があった。

こうして、２０１２年から「バンブーハウスプロジェクト」が始動した。当初は湖南市の助成制度である「きらめき湖南」の中に組み込まれ、３年計画であった。プロジェクトの目的は、竹林整備を通して、地域住民が触れ合える空間や機会をつくることである。この２０１２年～２０１５年の３年間の間に、菩提寺竹林の全体計画を行い、地域の人々が交流できる場を整えた。よって、今では荒れ果てた竹林が放課後にこどもたちが遊びにきたり、近所の親子が散歩しにきたり、公園のような場所になった。春にはたけのこ掘りのイベントが行われるようになった。



しかし、竹林は毎年の定期的な伐採と公園のメンテナンスが必要不可欠 であり、地域交流という点からも長期的なスパンで今後も関わっていくことが望ましいと考えられる。また、今までの活動が菩提寺の甲西北中学校に認められ、中学校の総合学習の時間をお借りして、共同で竹林整備を行えるようになった。地域と大学での竹林整備のサイクルと地域交流の継続的なあり方を模索できたらと考える。

菩提寺まちづくりフェスタ出展

菩提寺まちづくりフェスタ 2022

滋賀県湖南市菩提寺にある菩提寺まちづくりセンターで毎年行われている菩提寺まちづくりフェスタ。フェスタでは、地域で活動するサークルなどのパフォーマンスや作品が集まりお披露目・交流が盛んに行われます。小さい子どもでも楽しめるゲームコーナーや模擬店（今年度は中止）などもあり、大人から子供まで多くの人が楽しめ、地域のことをより深く知ることのできるイベントです。今年 度で BAMBOO HOUSE PROJECT の活動が、10 年目を迎えるということで、フェスタの展示の部にて私たちの 10 年間の活動についてポスターを作成し展示を行った。



また、11 月に滋賀で開催されたSDGs 全国フォーラムへの出展・全国フォーラムの特設ページへのオンライン掲載もさせていただき、地域の方々だけでなく、より多くの人に私たちの活動を知って頂く機会を得られた。

地域の方からの声



早いもので、平成 24 年度から滋賀県立大学と提寺まちづくり協議会で立ち上がった、「BAMBOO HOUSE PROJECT」も今年で 10 年が過ぎようとしています。

今期も新型コロナウイルスによる行動の制限が有った中また、今年は例年になく雪の多い年でした。ワークショップの前に雪が降り予定も中止となったりして、ご苦労の多い年となりましたが、いつも作業に来ていただき感謝しております。竹林が有る滋賀県湖南市菩提寺の菩提寺区が管理している竹林の再生の為、湖南市地域活性化推進事業に「BB 大作戦」と言う名前で、交付金を申請し採択され、荒れ果てた竹林の再生に取りかかっていただきました。

今年も学生の皆様は、寝袋持参してセンターで自炊、宿泊して作業をしていただき、施設の充実を行っていただいていて大変感謝をしております。

メンバーやの代表の方の交代が有っても、「BAMBOO HOUSE PROJECT」を継続的に維持が出来る継承は素晴らしいものです。まちづくり協議会のメンバーもそう有りたいのですが、高齢化で現実はなかなかむつかしいところですが・・・・、

整備を始めた当初は、地元の方の関心も少ないようでしたが、管理外の竹林も整備を少しずつ行っているうちに、地元の方からも感謝されるようになってきました。

地元の甲西北中学校と県立大学で環境学習も行なってもらっていたのですが、ここ 3 年間はコロナの影響で出来ていませんが、今年は出来るように中学校とのパイプ役に成れるように行いたいと思います。

ほぼ毎日の事と思いますが、地元の子どもたちが、竹林に遊びに来ています。休みの日には、家族で遊びに来ている所をよく見かけます。これからも皆様のご協力よろしくお願いします。

菩提寺まちづくり協議会

地域活性化委員会委員長　浅井基義

2023年3月31日発行

とよさらだ新聞

2023年3月31日
発行

とよさらだプロジェクトとは

とよさらだプロジェクトは、滋賀県犬上郡豊郷町の耕作放棄地を活用し、地域の方にご指導をいただきながら、露地とビニールハウスにて野菜の栽培を行っています。年間を通して様々な野菜を栽培しており、普段なかなかできない農作業を地域の方々と交流しながら楽しく活動しています。また、とよさらだでは、現代の農業が抱える問題点に目を向け、地域活性化につなげていく事を目指しています。

十三年の歴史に幕

発足から十三年の歴史を持つとよさらだですが、今年度限りで活動を終了します。移動手段の確保が難しく、作業に参加できるメンバーが減っていたこと、それにより普段の作業が難しくなってしまったことが主な原因です。近江楽座の中でも比較的長い歴史を持つとよさらだの活動終了は少し寂しいなと感じてしまいます。

湖風祭出店！

湖風祭（夏季）にとよさらだが出しました！メニューはいつも通りニオンリングです。一般の方や外部の出店などで思っていたより売り上げは伸びなかったものの、メンバー間の仲を深めることができました。



みかんへの挑戦

昨年度より育てていたミカンですが、小さいながらも実がなっていました！

ミカンを育てたいと言っていたメンバーも大喜びでした（笑）まだ小さかったこともあり、かなりすっぱいものでしたが育てることに成功しました！



活動の振り返り

今年度限りで活動を終了するということで、十三年続いた団体だったこともあり残念でなりません。ここ数年新型コロナウイルス関連で地域との交流が減っていたりと、コロナ禍以前のように満足に活動ができていなかったことも大きく影響していると思います。ただ湖風祭に出店するなどいい思い出もたくさん作ってくれたこのとよさらだに、メンバー一同感謝しています。

地域の声

若い世代に農業を広げるように頑張って欲しいとおもっていたが、昨年度より作業の頻度、参加人数が減っていたことも感じていた。十年近く前から活動を見てきたので、活動終了というのは残念だしもったいないと思う。

竹林GAKU

発行日:2023年3月31日

竹林 GAKU とは

竹林 GAKU では、滋賀県立大学の目の前を流れる一級河川犬上川の竹林を中心に、 放置竹林の整備と竹の活用を行っています。
地域の方や同じ近江楽座の団体といろんなイベントにも取り組んでいます。

ミニ門松ワークショップ



12月3日に多賀町立博物館でミニ門松のワークショップを行いました。初めて自分たちで計画から行ったイベントで、多賀町で活動している YOBISHI さんの協力をしていただき、竹林 GAKU はミニ門松を、YOBISHI さんはしめ縄のワークショップをすることができました。

親子連れで参加してくださる方が多く、体験された方からは、「体験できてよかった。」「玄関に飾りたい。」といったコメントをいただきました。

来年も、今年気づいた点を活かして門松づくりをはじめとした竹の活用方法を見つけていきたいです。

←体験された方が作ったミニ門松。竹林 GAKU が採取した細い竹と太い竹を組み合わせ、竹の枝や折り紙、Atelier Lihico さんの協力でより華やかに。

プロジェクト自慢

竹林 GAKU は竹林整備以外にも、竹を使ったワークショップや製作を積極的に行っており、竹の魅力を竹林 GAKU だけの視点から発信できるように努めています。湖風祭やよびし市で行った展示は、多くの人に興味を持っていただきました。

また、活動を持続可能なものにすべく、自分たちで助成金を確保し、無償で受けられる制度を活用しています。



地域の方の声

●伐採した竹の活用に、地元伝統文化の継承を考え、ワークショップでいかに満足度と魅力あるものを、参加者に提供できるか一緒に考えられたことは、大変良く、刺激を受けた。(YOBISHI プロジェクトの方)

●犬上川の放置竹林から、竹あかりができるようないい竹が生えているとは思わなかった。放置竹林に少し興味を持った。(よびし市の展示を見にきてくださった方)

成果と課題

今年度は、「門松ワークショップ」という「自分たちが学びの起点になる活動をすることができ、団体名の竹を対象に「楽しく」「学ぶ」ということを願ってつけた名前にあった活動ができたようで嬉しかったです。

活動のうち、竹林整備活動は人数が多い方が捗るため、継続して竹林整備に参加してもらえるように、楽しい要素を増やしていくことが課題です。

2023年3月31日　発行

リソーズ
日夏里（ひかり）かがやけプロジェクト

リソーズってどんな団体？

　2022年度から彦根市日夏町で活動を開始した団体です。リソーズでは、”日夏町での活動を通じて地域の人と交流すること”、”日夏町の魅力を発信して日夏町を盛り上げること”を活動目的としています。
　学生主体の活動なので、自分たちで企画したり、新しいものをつくるという経験ができます！

リソーズ的ビッグニュース

　昨年11月に行なわれた湖風祭では豚汁を販売し、２日間ともに完売することができました！自分たちで栽培したサツマイモも具材として利用し、美味しさにこだわった豚汁を作ることができました。
食べに来てくださった方々、ありがとうございました！



一年間の成果と課題

　一年間での一番の成果は、一年間継続して活動することができたことです。メンバーも少ない中、様々な活動を行なうことができたのは積極的に活動に取り組んでくれる地域の方、メンバーのおかげだと思います。
　その中でも朝市に出店し、多くの人とお話できたことはリソーズ全体の士気の向上につながりました。自分たちで栽培した野菜を販売することで農作物を生産するという立場にも立つことができたのではないかと思います。



　一方でメンバーが少なく、なかなか活動に人が集まらないことや自分たちの活動範囲が限られてしまうことがあったので、活動に関わってくれるメンバーを積極的に募集します。はじめに立てた事業計画通りに活動を行なうことができなかった点は大きな課題だと思います。



　一年間の活動を通して畑にかかる時間だったり、朝市の準備にかかる時間などがわかったので、今年度は実現可能な事業計画を作成します。

どんな人が活動しているの？

リソーズに入った理由は？

- 大学生ならではの活動をしてみたかった
- 野菜を育てて友達と食べたり、地域の人に販売するのが楽しそうだったから

楽しかったことは？

- 朝市！
- さつまいも掘り！
- 収穫したさつまいもでパーティーをしたこと





大変だったことは？

- 無理のない程度で行なうため、大変だと思うことはない
- 活動の方針を決めたとき
- 朝市の準備





地域の方の声

　日夏町はかつてすばらしいまちづくりをしていたように思い、地域の素材を大切に残していくように努めてきました。しかし、日夏里館のように使いきれていない施設や、畑・ハウス・古家など地域資源が数多くあります。そんなところに若い県大生が新しい取り組みをしてくれることを大変うれしく思いました。

日夏里ファンクラブ　古川さん

かみおかべ古民家活用計画
-Sleeping Beauty-

古民家が寺子屋に!?

8月24日、かみおかべの古民家では寺子屋イベントが開催された。このイベントは今年度からの新たな取り組みであり、上岡部町の子どもたちを呼んで実験や工作を行うものである。今回は、たまごを酢漬けにするとどうなるのかという実験を実施した後にペットボトルロケット作りと飛行実証を行った。

たまごの酢漬け実験では、酢を入れたプラスチックコップにたまごを割らずにそのまま入れるという実験の手順を実演した後、予め酢漬けにしてあったたまごを見せ、触ってもらうことでたまごの変化を感じてもらった。

今回のイベントのメインであるペットボトルロケット作りも大盛況だった。各自持ち寄ってもらったペットボトルに思い思いの飾り付けをしてもらい、近くの公園で飛行実証を行った。水を入れたペットボトルロケットを工学部のメンバーが改良を重ねたロケットの発射台に装着し、空気の圧力で飛ばす仕組みである。安全に飛ばすことできるように注意しつつも、自分で作ったペットボトルロケットを高く飛ばそうとする子どもたちはとても生き生きしていた。





プロジェクト紹介

かみおかべ古民家活用計画は、彦根市上岡部町にある一軒の古民家を拠点に活動し、「地域よし×学生よし×家主よし」をモットーに地域のための古民家活用を目指している。今年度は、主に古民家改修とイベントを行った。来年度もこれらの活動を継続していく。

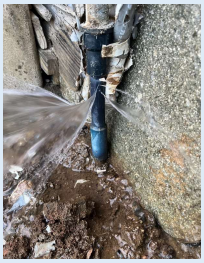
古民家の自慢ポイント

9月16日に居間を中心に、冬に向けての寒さ対策として改宗を行った。まず、居間の畳の下に気密シートを引き、床下からの冷気を防ぐ工夫をした。そして、中央にストーブを置き、それをみんなで囲めるテーブルを制作した。ストーブの上では、食材を加熱することも可能で、お正月イベントでは、つきたてのお餅を焼いて地域の方に振る舞った。地域の方々はとても喜んでくださり、ストーブの火とテーブルの木の暖かさで、心地よい団らんの空間が生まれた。



事件発生　水道の大切さを実感

テスト週間が終了し、古民家での活動が再開できるようになった2月中旬、古民家の水道管が割れていることが発覚した。そのため、当初予定していた節分パーティーの開催を断念することになってしまった。2月27日、工事を行っていただき、再び使用することができるようになった。水道の大切さを実感する出来事であった。



全体を通しての成果と課題

今年度は、積極的に古民家改修に取り組み、より住みやすい環境に近づけることができた。新型コロナウィルスの影響も比較的少なくなり、感染対策をしながらも、イベントは問題なく開催できた。しかし、1月22日のお正月イベントでは、事前に告知していたものの、参加者が少人数しか集まらず、予定より時間を短縮して行う結果となった。実は、そのイベントの日は、多くの子どもたちの予定がある日だった。そのことをイベント開催側が、把握できていなかったことが原因と考えられる。今後は、イベント開催日などを決める際に、しっかりと地域の方々の意見を聞くことを意識したい。そのために、地域の方々といかに交流し、連携を図っていくかが来年度に向けての課題である。

おとくら新聞

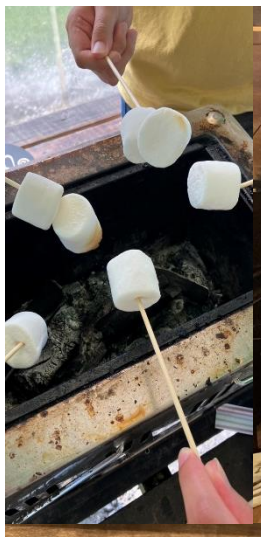
発行日
2023年3月31日

おとくらとは？

おとくらプロジェクトは彦根市高宮にある古民家での喫茶店営業を中心に活動している。毎週土曜日と日曜日に喫茶店を営業し地域の方や観光客の方との交流をしている。喫茶店の営業の他にも高宮の活性化につながるような活動に取り組んでいる。今年度は毎週火曜日のお昼休みにミーティングを行いメンバー間で情報共有を行った。メニュー、イベント、ギャラリー、広報の四つの班にわかれ団体の運営をしている。メニュー班では新メニューの考案やメニューの講習会、イベント班ではおとくらで開催されるイベントの企画、運営を行っている。ギャラリー班では毎月作家さんや学生によるギャラリー展示の手伝い、広報班では「おとくらつうしん」の発行やSNSの更新を行っている。

ちょっときいてよ！　おとくら自慢

おとくらで活動をすると人脈を広げることができる。メンバーどうしの縦と横のつながりを広げることができるのはもちろんのこと、高宮の地域の方とのつながりをもつことができる。おとくらの家主である加藤さんをはじめ多くの方と関わり、高宮の活性化につながる活動に参加することができる。新型コロナウイルスにより喫茶店営業、地域の方との関わりにも影響が及ぼされた。現在は制限も緩和され喫茶店営業を再開し、これからさらに地域の方と関わる機会を多くしていくことができると考えられる。今年度の活動で得ることができた成果や課題を活かして、来年度は喫茶店営業や地域の方との交流を通した地域活性化を深める。



















おとくらプロジェクト

地域の声

おとくらの家主である加藤さんより「今年度は、十三代目ふるふる号（古田航己）が始動しうれしい事がいっぱいありました。十一代目、十二代目のみなさんコロナ禍のなかなか活動できない中、本当にご苦労様でした。君たちのおとくらへの念いのお陰でコロナに潰されず今のおとくらがあります。すごく感謝しております。先輩の協力のお陰もあってコロナ対策実施店舗の認定を受けて、記念すべき日五月七日を迎えました。当日は、彦根市長も駆けつけていただき、また、その前にNHK 630しが鉄に取り上げてもらい、いい宣伝となりオープンにうれしい再開でした。コロナのため何度か中止になった辻元さんのコンサートも復活し、メンバーの作ったチラシは、素晴らしいものでしたよ。お節介なおっちゃんのひと言です。「おとくらは、みなさんにとって、みなさんが楽しむ事が一番です。」来年度も、なかなかの大変ですがコロナ前に戻ってくれる事祈ってます。自称「おとくら応援隊隊長」をいつまでも、よろしくお願いします。」とコメントをいただきました。

ビッグニュース　営業再開！

今年度は新型コロナウイルスによる規制が緩和され、喫茶店営業を再開した。また、ギターの演奏会や映画の鑑賞会など地域の方との交流も徐々に多くなってきている。

新型コロナウイルスの影響で喫茶店の営業ができない状態がつづいていたが、二〇二二年五月七日に喫茶店営業を再開した。メンバーの全員が初の喫茶店営業を迎え、三回生を中心に毎週土曜日と日曜日の営業にあたった。おとくらの家主の加藤さんをはじめとした多くの地域の方の支えのもと一年間喫茶店の営業を続けることができた。

ギターの演奏会や映画鑑賞会ではおとくらのメンバーで企画、運営をし、わらび餅や白玉、コーヒーの提供を行った。

成果と課題

今年度は喫茶店の営業を再開することができ、地域の方との交流の機会も増やすことができた。毎週のシフトや湖風祭での出店、ギター演奏会、映画鑑賞会などによりおとくらの活動を様々なところに発信することができた。また、湖風夏祭や湖風祭にも出店し学内へもおとくらの活動を紹介することができた。

ギャラリーの展示ではHand Making Circleさん、座沖島さん、あかりんちゅさん、現代視覚文化研究部さん、竹林GAKUさんといった近江楽座の他団体の方の展示を行った。メニューには政所茶レン茶 ゙ーさんの政所茶を提供した。以上のように今年度は近江楽座の他の団体との関わりを深く持つことができた。

新型コロナウイルスの影響が少なくなり、活動が活発化した一方で活動に参加できる人数が限られてしまった。シフトに入れる日も限られてしまい、営業をすることができない日も生じてしまった。来年度は喫茶店を営業する日をできるだけ多くできるようにしたい。また、来年度は喫茶店の営業だけではなく高宮の地域活性化により取り組めるようにしたい。

— 発刊日　2023年3月31日—

活動報告新聞

チームのビッグニュース

未来看護塾の今年のビッグニュースは、一〇月に行われたビバシティ彦根での「応援！生き活き健康生活」である。ここでは、学生計七〇名がボランティアに参加した。今回は、大人も子どもも楽しめるように、「ちびっ子広場」と「健康ブース」の二つのブースを設置した。「ちびっ子広場」では、子どもたちが五つの用意された遊びをし、全て回れたらバルーンアートのプレゼントを行った。終始子どもの笑い声が絶えず、非常に微笑ましい雰囲気でやり遂げることが出来た。一方で、「健康ブース」では、血圧測定や身体測定、生活習慣病関連クイズのコーナーを設置した。また、未来看護塾の卒業生にも来ていただき、地域の方が実際に働いている看護師・保健師に健康相談をできるコーナーも設置した。こちらは非常にのどかな雰囲気で、来てくださった方と交流することができた。そして、ステージではラジオ体操やハンドベル演奏、バルーンアートを行った。ステージ上から鳴り響くハンドベルの演奏は、その場にいる沢山の方の心を癒やしただろう。人と関わることが難しくなってしまった中、こうして、沢山の方と関われたことは学生にとって非常に貴重な機会であり、自分の看護観を考える良いきっかけとなっただろう。来年度以降も、このような貴重な機会を一つ一つ大切にしながら、益々多くのイベントを積極的に行っていきたい。



プロジェクト紹介

未来看護塾は滋賀県彦根市を中心に地域住民との関わりを重視しながら身体的、精神的健康を援助する活動をしている。また私たちの活動目標はSDGsの目標である「すべての人々に健康を」と重なっていると考えられ、滋賀県立大学のSDGsの活動にも関わらせていただいている。また活動を通じて自身の看護観を磨くということもこの団体の目標である。今年度も昨年度と同様に感染症の影響を受け様々な活動が制限された。今年度の具体的な活動は、どんぐり県大前保育園、NPO法人ぽぽハウスでのボランティア活動、湖風祭での児童向けイベント、城南小学校での保健室ボランティア、ツリーハウスさんでの交流、また、外部の団体さんの主催されるイベントへのボランティアである。例年では、地域住民に向けた簡易的な健康チェック、宮城県南三陸町での被災者支援も行っている。また、年明けより友仁山崎病院でのボランティアを開始することができた。この活動を通じて私たちも入院患者との関わり方、児童の発達について学ぶことができている。看護に興味がある学生はぜひ活動に参加してみてはどうだろうか。



地域の声

今回のヒアリングではツリーハウスを担当されている森亜由美様からお言葉をいただいている。今年度の活動に対し森様は、「夏バテ予防のメニューや脱水について訪問する際のチラシを丁寧に作ってくださり、お宅訪問してくださる事でお住まいの方と、顔を合わせてご様子を聞かせていただくことが出来ました。集会所にて参加者さんと脳トレやCUECARDも一緒にしてくださり、多世代での交流会もでき楽しい時間を共有してくださいました。今後も、医療福祉を身近に多世代の交流から孤立しない居場所を学生さんと共に作り上げていけたらと想っています。」と述べてくださった。私達の活動が誰かのためになっていることに嬉しく思う。これからも関わらせてもらえるということに感謝して活動に邁進していきたい。

ちょっと聞いてよ！ 活動自慢

①未来看護塾のボランティアに参加すると、非常に幅広い年代の方と関われる。そしてコミュニケーションを鍛えることができる。今年度定期的に活動させていただいたツリーハウスさんでは、ご年配の方と沢山交流させていただいた。ご年配の方とお話しすることはその方の人生について知り、教養を増やすことができる。このように活動を通して、沢山の方と関わることで興味のなかった分野に興味を持ったり、自分の興味がある分野を再度認識できたり、そして、将来の仕事を決めるきっかけにもなる。大学生以上の人とかかわる機会をもつことで、自分の視野を広げることが可能となる。

②未来看護塾のボランティアに参加すると、思わぬ特技の習得ができる。それが、バルーンアートとハンドベル演奏である。これは湖風祭やビバシティ彦根で行われる「ちびっこ広場」とステージ発表で行われる。バルーンアートの技術を身に付ける一番のメリットは子供の笑顔を見ることができるというところである。子ども達は珍しいものが好きでバルーンアートという日常生活であまり見ないものを貰ったり、一緒に作ったりするととても喜ぶ。子どものことが好きな人はとても楽しいので身につけてほしい一方でハンドベルは非常に心を癒やす能力がある。音楽療法というリラクセーションがあるように、看護にも使える特技である。数人で演奏するのは非常に楽しく、また、聴いてくださる方の表情が柔らかくなるのが見られるため、非常にやりがいを感じる。これらが未来看護塾で身に付けることができる特技である。興味を持った人はぜひ私たちと一緒に活動しよう。







1年間の成果と課題

今年度は、感染症の影響も受けたが、非常に活発に活動ができたと考える。特に、今年度は、外部の方との繋がりを強くすることができた。これは、未来看護塾の認知を広げるだけでなく、より多くの地域の方の健康に携われたと言えるだろう。しかし、今年度は、沢山の活動があったからこそ、活動する人の固定化や継続して参加する人の少なさがより一層目立つ結果となった。来年度以降は誰もが一回以上参加出来るように、よりボランティアの楽しさをアピールしていきたい。また、今年度繋いでくださった縁を大切に、益々活動を積極的に行っていきたい。

沖島に謎の休憩所現る

緑の物体の真相はいかに



ついに屋根完成か

二〇二二年一一月のとある日、ついに流木ハットに屋根がかかった。屋根を葺くことで、休憩所としての機能がより向上した。

以前から、沖島の人から、「休憩所でゆっくりできるような屋根がほしい」という声があった。そこで、屋根を葺くことで、日陰となる場や雨宿りできる場を創出することを目的とした。

屋根を葺く工程としては、躯体となる流木に葦を葺いて、仕上げに笹を葺いた。なお、笹については、沖島の小学校裏の竹を刈らせていただき、その竹から笹を刈って笹を結った。



屋根葺き作業の様子

葦を葺く際には、茅葺職人の方にアドバイスをいただきながら、雨漏れしない屋根の葺き方にした。

なお、屋根葺き作業は、ワークショップ形式で行うことで、研究室メンバーだけでなく、環境建築デザイン学科の学生とともに活動した。

屋根を葺くことで、沖島の住民の方からは「建築らしくなった」「ここで休憩してみたい」という声をきくことができ、沖島の住民の人にとってRYUBOKU HUT は単なるオブジェのような置物ではなく、使ってみようという気になる建築になった。しかし、まだ常にRYUBOKU HUT が使われているわけではないので、今後は常に使われる滞在のデザインを考えていく必要がある。



茅葺職人さんによる講習の様子

今年度は、沖島の自治会の方のイベントに招いていただき、RYUBOKU HUT とその周辺にイルミネーションを行った。期間限定で、普段とは異なる表情を見せた。

また、沖島の文化祭にも参加し、RYUBOKU HUT 内部には、これまでの三年間の施工過程を展示した。施工過程の写真と説明を吊るす、という展示方法によって、子どもからお年寄りまで楽しんでもらえた。



イルミネーションの様子

座・沖島新聞

@ZA_OKISHIMA

座・沖島プロジェクトとは

日本で唯一湖に人が暮らす島、沖島。島民は漁業を生業に琵琶湖と共に暮らしてきたが、暮らしの継承が危ぶまれる。このような沖島の状況に「学生も何かできるのでは？」と「まなぶ」「まじわる」「ささえる」の３つを目標に島の振興のための活動をしている。基本的には島民にどんな活動をしているのかをヒアリングして、島民により根差した活動を目指している。

運動会のお手伝い

二〇二二年十月二日、沖島小学校で運動会が開催され、私たち座・沖島のチームも会場の設営や競技で使う道具の準備などに参加した。玉入れやリレー、徒競走など、私たちも子供たちに負けないくらい夢中になって競技に取り組んだ。沖島小学校は昨年二〇二二年で創立１３０周年を迎え、運動会終了後、島の高齢者の方から子供たちまで、たくさんの人々が集まり、みんなで「１３０」の数字になるように整列し、上空からドローンで記念撮影した。



防犯グッズリレーのお手伝いをする様子

湖魚祭りで青パパイヤ販売

二〇二二年十月三十日に、沖島で湖魚祭り（おきしまるしぇ）が開催された。島の方が捕ったホンモロコやびわます、島で採れた野菜を使ったカレー、使わなくなった食器などが売られており、私たち座・沖島のチームはそれぞれのお店に配属し、販売や接客のお手伝いをした。また、座・沖島のチームが沖島の耕作放棄地で栽培していた青パパイヤも販売した。あまり見かけない青パパイヤに興味を持ってくださるお客さんも多く、３０個ほど買ってもらうことができた。



収穫した青パパイヤを販売した様子

ちょっと聞いてよ！

プロジェクト自慢



畑の近くにあるプライベートビーチのような空間。木々に囲まれ琵琶湖を一望できるこの場所でリラックス♪

地域の方の声

運動会や佐儀長祭りなど、本来の沖島行事にも参加していただき、島民の皆さんとの交流も少しずつ取り戻せた一年になりました。来年度も沖島の色々な行事に参加してもらい、明るい光をもたらせてもらえたら嬉しいです。

１年間の活動を振り返って

湖魚祭りや運動会など、様々な行事を通して沖島の方と交流を深めることができた。これからもインスタグラムでの広報活動を積極的に行い、沖島に興味を持ち活動に一緒に励むメンバーを増やしていきたい。

制作　寳田美乃里



おおりびと新聞

2023年（令和5年）
3月31日

↓Instagram 随時更新中です！
@OORIBITO

男鬼プロジェクトについて

男鬼集落は滋賀県彦根市の山間部に位置する廃村集落である。1970年代に廃村になってから約50年、今でも多くの歴史や文化の痕跡が残っている。集落を流れる小川や茅葺き屋根と囲炉裏を持つ民家、集落にひっそりと佇む神社はかつての男鬼集落で自然とともに生きた人々の美しい生活風景を何処か思い出させてくれる。

本プロジェクトでは男鬼集落の再生を目標に、集落のさまざまな可能性を模索しながら、実践と研究を積み重ね、一歩一歩、着実に、新しい歴史を紡ぎ出していく。

男鬼集落がみせる風景

男鬼集落には川が流れており、この川は彦根市内を流れる芹川源流にあたる。集落には7軒の家屋と庫裏、小屋などが残っており、状態は悪いものの、7軒のうち1軒は茅葺屋根のまま残っている。集落には誓玄寺というお寺もあったが、現在は廃寺となり庫裏のみ残る。男鬼町は、彦根市の都市計画における市街化調整区域に分類され、冬季は多雪地域のため多賀側の道は閉ざされ、鳥居本側からのみのアクセスとなる。



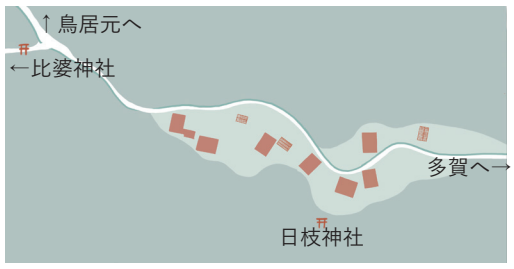
↑川で食器を洗う



↑集落に流れる小川



→川の音で昼休憩をとる



今年度の活動のふりかえり

①解体ワークショップ

②木材倉庫の整理



集落に残る家屋のうち一軒の家屋の改修に取り掛かるための下準備として、家屋の解体ワークショップを行なった。集落で生きた民家のさまざまな歴史が顔を出した。



→休憩時間にはYさんが縁側でお茶を出してくれた。

集落の元住人であり、かつて材木商を営んでいたYさんが所有する木材倉庫を本プロジェクトに任せていただけることになり、倉庫の整理と木材の実測・記録を行なった。

③森林伐採

谷地に位置し、日射時間が短い集落に日射を取り入れるため、裏山の杉の人工林の伐採をおこなった。伐採した木の一部は、乾燥・製材を行い家屋改修などで活用する。



活動から学んだこと。

調査と記録の昨年度を経て今年度の活動では、民家の解体や裏山伐採など、実際に集落に手を加えていくことに取り組んだ。その中で、現地活動の中でしか得られない実感があること。その実感を持ってプロジェクトと向き合うことが将来の発展につながっていくことを学んだ。今後も1歩ずつ、丁寧に課題と向き合い、プロジェクトの発展につなげていきたい。

地域の声　大久保 則雄さん

県立大学学生窓口が、川畑さんから岡田さんに引き継がれて一年が過ぎた。

彼の尽力があって、9月に一般社団法人「おおりびと」の設立が実現できた。理事会で文字部局機能を担ってくれている。拙宅の調査・廃品の処理、協力者による提供製材端材の調査・保管を通して地権者との信頼感も広がってきた。5月比婆神社の春祭り、11月しめ縄奉納では一緒に参拝手伝いをしてくれた。師走12月には、拙宅周囲の樹木伐採にも着手された。歴史文化の高い潜在性、芹川源流の治山治水の側面を併せ持つ男鬼町、来年度は、社団法人として活動が本格化する。持続性を持って、当初の目的を一歩ずつ進めていただきたい。

News

活動を取材していただきました。



[historica 男鬼集落] で検索

全国の廃村を紹介して巡っておられるyoutuber「historica」さんに、一度に渡って動画で取り上げていただきました。動画では視聴者の方々からの大きな反響があり、たくさんの関心や、応援コメントをいただきました。

2023年3月31日

県大ラジオ部

発行
県大ラジオ部
滋賀県立大学
近江楽座
活動報告新聞

県大ラジオ部とは

県大ラジオ部は「地域と大学を繋げるラジオ番組」をモットーに前年度発足し活動を開始しました。前年度はエフエムひこねでの番組放送を主な活動としていましたが、今年度は湖風夏祭での模擬店インタビューや県大キャンパス内での屋外放送の二つが主な活動となりました。地域と関わりの強いこの滋賀県立大学ならではの特徴を生かす広報という重要な役割を担っていきたいと考えています。



ある団体の活動の一部を引き継ぐことに

多賀町の魅力を発信する近江楽座「Taga-Town-Project(TTP)」。その引き継ぎ手が今年度でいなくなるということで、その一部活動を県大ラジオ部が引き継ぐことを2023年2月6日に決定しました。そのプロジェクトとは彦根市にある高速道路整備会社中栄のウェブマガジン作成です。大雪時の対応や作業員の方の一日など普段知ることのない情報を、県大ラジオ部ならではの音声収録を織り交ぜて発信していきたいと考えています！

屋外放送にて学長との交流も

7月5日から7月13日にかけて、滋賀県立大学キャンパス内で屋外放送を実施しました。その最中にこの県立大学の廣川能嗣学長にも立ち寄って声をかけていただきました。



屋外放送の様子

地域の声

今年度はエフエムひこねでラジオ番組の放送開始が出来ず、地域の方との関わりが取れませんでした。来年度からは前述の株式会社中栄さんなどから、地域の関わりを広めていきたいです。

活動を振り返って

学内での活動を通して他の団体や教職員の方々と関わることによって、まだ認知度の低い県大ラジオ部を知ってもらういい機会になりました。TTPの活動を一部引き継ぐことにもなり、今後の活動にも期待の持てる結果となりました。

突然の代表の変更により後期は活動が出来ず、地域との関わりが取れませんでした。来年度は学内から活動を広げエフエムひこねへの復帰を目指していきたいです。

Cebu Parian Project 2022

2023 年 3 月 31 日発行　セブ パリアン プロジェクト　橋本京佳　葛輪優　Earnest Calalang

セブ パリアン プロジェクトとは

CEBU PARIAN PROJECT は、地域で出たプラスチックゴミを地域の中でクリエイティブに再生し、新しい循環型社会を目指すプロジェクトである。
滋賀県の琵琶湖 × フィリピン セブ パリアン地区を活動拠点とし、子供から大人まで誰もが参加することができるワークショップを開催することで、湖、河川、海に廃棄された廃プラスチックゴミに関心を持ってもらい、滋賀県の琵琶湖・フィリピンの環境を綺麗にすることをテーマに持続可能な環境調和のまちづくりを目指していく。

背景と目的　滋賀県 × フィリピン

現在､海や河川で「プラスチックゴミ」やそれらが経年劣化等の要因によって細かくなった「マイクロプラスチック」が問題視されており、国や企業が SDGS といった長期的持続可能な開発目標に基づいた対策を続けている。海だけでなく、湖にもプラスチックの影響が出ていることが昨今の研究で明らかになっている。

その中で、私たちは滋賀県の琵琶湖とプラスチックの廃棄物問題が特に深刻化しているフィリピン セブのパリアン地区を対象とし、廃棄物をリサイクルするための機械制作、取り組みの共有による環境への意識改善、また、地域の方と清掃活動に取り組んでいる。

その背景には問題視されているマイクロプラスチックによる湖、河川、海の水質汚染、特にフィリピン　セブ市・パリアン地区においては、ゴミをリサイクルする環境が整っていないことや、法律によりプラスチックは適切な焼却施設以外では燃やすことが出来ず、そのまま河川や、海へ投棄されている現状があり、生活する上で不衛生な環境が現状としてある。貧困にある人々は河川や海沿いに居住しており、生活ゴミや汚水を簡単に捨てられることが理由としてある。行政では年に二回ほどしかの河川の清掃が行われず、街のゴミ回収も数か月に数回ほどしかこないという話も街に暮らす人に聞くことができた。リサイクルにも高額な費用がかかることや、投棄されたゴミを集めることで生計を立てる人たちもいることも事実としてある。

私たちの取り組みとしてはプラスチックゴミを資源として新たに活用することで、地域で循環させる目的がある。









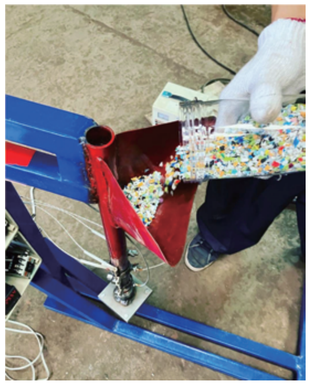


プラスチックリサイクルで新しい価値を

私たちの取り組みとしてはプラスチックゴミを資源として新たに活用することで、地域で循環させる目的がある。ゴミの削減はアジアだけでなく、世界的なテーマでもあり、各国では様々な取り組みが行われている。プラゴミを再生するオランダ発祥のプロジェクト「プレシャスプラスチック（Precious Plastic)」の一環で機械の設計図を公開しており、この取り組みは世界 100 か国ほどに広がっている。設計図を基に制作した加工機械を使い、ペットボトルキャップを細かく砕き、180 度程度の電気熱で溶かし、人が押し出す力で金型の枠にプラスチックを流し込む仕組みとなっている。これらの過程から、コースターや壁に張るタイルや、チェス盤等に新たに活用することができる。



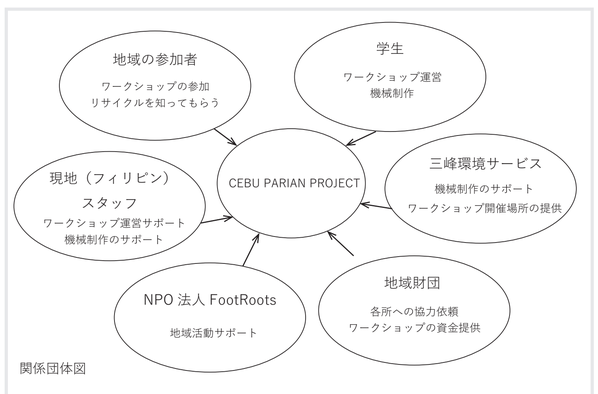




活動形態　機械制作とワークショップの運営について

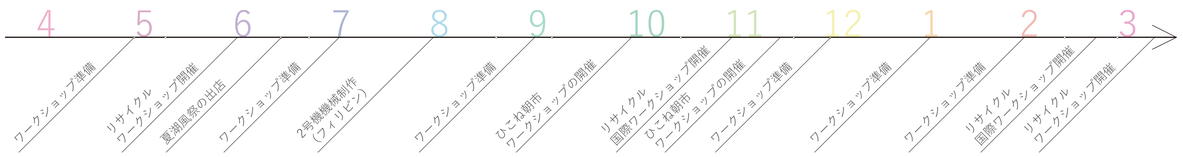
学生を中心とし、リサイクル機械の制作、ワークショップの運営を行っている。機械制作に当たっては、滋賀県の企業とフィリピンの職人の協力を得ながら、今年度までは二機目の制作に至った。滋賀県での活動は、大学の校内、イベントスペース又は企業の方に場所を提供してもらい行っている。フィリピンでの活動は、コロナ以前までプロジェクト活動の拠点としていた施設である Jesuit house を地域活動スペースとして利用しており、機械制作、ワークショップを開催している。

このようにワークショップ開催時には協力団体に場所の提供、運営のサポートを受けながら、定期的なワークショップ開催を行っている。地域の子供達や、リサイクル活動に興味を持ってくださる多くの参加者がおり､今後も活動場所をより広げながら､リサイクル活動を知ってもらい、環境問題について考えてもらうきっかけづくりとしていきたい。





今年度の活動スケジュール



今年度は滋賀県とフィリピンの両方で定期的なワークショップ開催を実現することができた。ひこね朝市にも２度ワークショップを開催しており、今後も幅広く活動をしていきたいと考えている。

活動その 1. フィリピンにてリサイクル機械制作

シュレッダー（細断機）・インジェクション（射出成型機）の制作

フィリピンにて、プラスチックリサイクルのための「シュレッダー（細断機）」「インジェクション（射出成形機）」の二つの機械制作を行う。これらの機械を制作することで、リサイクルワークショップの開催を目指した。

プラスチックをリサイクルするための機械を地域の職人の方と協力しながら、学生を中心に制作に取り組んだ。この機械は使い方がシンプルなことから、子供から大人まで誰でも簡単に扱うことができ、ペットボトルキャップから新しい製品をつくることに加え、子供達にリサイクルの大切さを知ってもらうためのツールとして利用してもらうことができる。





主に制作した機械は右図の二つである。

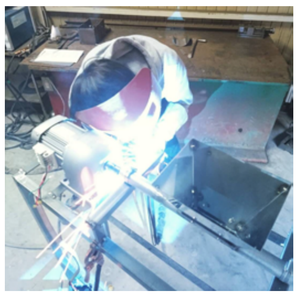
① 「シュレッダー Shredder（細断機）」・・・プラスチックをフレーク状に粉砕する。（左側写真）

② 「インジェクション Injection（射出成形機）」・・・フレーク状のプラスチックを加熱し、金型に射出する。（右側写真）

実施日・活動場所

2022 年 8 月 11 日 ~8 月 17 日

フィリピン セブ パリアン地区 Jesuit house（フィリピンの活動拠点としている施設）









成果と課題　機械制作を終えて

活動の成果として、初号機の制作では、シュレッダー（細断機）の刃の問題や刃とモーターの接続に問題があったが２号機ではそれらの問題を解決することが出来た。しかし、モーターのパワー不足が問題として分かった。インジェクション（射出成形機）は、強度的に補強が必要な部分が分かった。

課題として、モーターのパワー不足の問題を解決する必要がある。また、インジェクションの構造で、強度的に弱い部分に補強をする必要がある。

活動その 2. 滋賀県リサイクルワークショップ開催

滋賀県・ひこね朝市にてワークショップの開催

昨年度に学生と連携企業で共同で制作した廃プラスチックリサイクル機械を用い、滋賀県にてワークショップの開催を行い、滋賀県に暮らす地域の方を対象としたリサイクル体験活動を行った。琵琶湖の浜、日常生活にて廃棄されたプラスチックゴミをリサイクル機械を用いて、地域の方と共にプロダクト制作を行い、リサイクル活動の面白さを体感してもらい、プラスチック廃棄物の問題について少しでも知ってもらうきっかけづくりとした。また、ひこね朝市に来られた地域の方や子供達に多く参加してもらい、リサイクル活動を知ってもらうことができた。

実施日・活動場所

①2022 年 6 月 26 日
②2022 年 10 月 16 日 11 月 20 日
③2023 年 3 月 12 日
①　滋賀県立大学・琵琶湖畔
②　彦根市「ひこねで朝市」
③　滋賀県湖南市









活動その 3. 国際リサイクルワークショップ開催

フィリピン セブ パリアン地区にてワークショップの開催

廃プラスチックリサイクル機械を用い、フィリピンにて初となるワークショップの開催を行い、滋賀県に暮らす地域の方を対象としたリサイクル体験活動を行った。フィリピン セブ パリアン地区ではリサイクルできる環境が整っておらず、貧困層にある人たちは投棄された廃棄物を収入源としながら、生計を立てて現状もある。数少ない施設でしかプラスチックは処理されず、多くが河川や海に不法投棄され、プラスチック廃棄物の深刻化が進んでいる。地域の人たちに身の回りにあるプラスチックはすべて資源であり、機械を用いて新たな価値を生み出せることをワークショップを通して知ってもらい、認識を変えてもらうことで生活環境の改善や、製品として収入源にできれば、暮らしの支援も行えると考える。これらのことから、現地でのリサイクルの仕組みづくりを目的としている。

実施日・活動場所

2022 年 11 月 2 日 ~11 月 12 日
2023 年 2 月 25 日～ 3 月 6 日
フィリピン セブ パリアン地区 Jesuit house
（本プロジェクトがコロナ以前、活動拠点とした施設）









成果と課題　滋賀県・フィリピンのワークショップを終えて

活動の成果として、地域の方に環境問題とプラスチックリサイクルを知ってもらうことが出来た。このワークショップでは、現地で制作したマシンを実際に使ったため、現地でも機械製作とプラスチックリサイクルが可能であることが分かった。参加者の子どもたちがワークショップで楽しんでいる姿を見て、プラスチックリサイクルの可能性を小規模でも広め、プラスチックごみ問題について知ってもらう目的を達成できたと感じる。

参加者の声



・ワークショップ参加者の声からはこのような意見を聞くことが出来た。「環境問題については知っていたけれど、このリサイクル方法は初めて知った。」「リサイクルの仕組みが興味深い。」

・「リサイクルの流れが見えることで、分別やリサイクルをしようと思った。」「若い人たちがこうして環境問題に取組んでくれて嬉しい、安心出来る。」等、他にも様々な貴重な意見を知ることができたため、今後の活動に活かしていきたいと考えている。